

日本地球惑星科学連合 2012 年大会の展示ブース出展報告

今西和俊（産総研 地質標本館），松平直紀（産総研 地質調査情報センター）

2012年5月20日から25日にかけて，日本地球惑星科学連合2012年大会が幕張メッセ国際会議場において開催されました。地質調査総合センター（GSJ）では，例年どおり2階ホールにおいて展示ブース出展を行いました（写真1）。用意したパネルは，GSJの各ユニット紹介のほか，平成23年度産総研理事長賞を授賞した津波堆積物調査に関する研究紹介です。また新刊地質図幅2種類（熱海，加茂）をパネルに貼り出し，宣伝を行いました。ブースではその他に，地質図（紙媒体，CD-ROM），鉱物トランプ，ペーパークラフト，絵葉書などの販売や，今年の1月に創刊したGSJの新しい広報誌「GSJ地質ニュース」の紹介も行いました。また，GSJ，地質標本館，地熱研究，地質標本館春の特別展「砂漠を歩いてマントルへー中東オマーンの地質探訪」などのパンフレット，「化石アトラス」，「生物と地球の歴史」のポスター，ジオパーク20面体サイコロ（尾池和夫・日本ジオパーク委員会委員長考案，GSJ制作）などを無料配布しました。

例年に比べてブースでの販売は伸び悩みました。これは，東日本大震災の影響で地質図幅の新刊が少なかったことが影響しているようです。鉱物トランプやペーパークラフトなどはほぼ例年どおりの売れ行きでした。無料配布したポスターは今年も評判が良く，ともに300部を超える配布となりました。「同僚が持っていて羨ましく思っていました」，「子供が小さいうちから見せておくといいかも」，「これを見ながら地球の歴史を勉強しなおります」などのコメントとともに，満面の笑顔でお持ち帰りいただきました。また，今年の新ネタともいえるジオパーク20面体サイコロも好評で，2012年5月現在日本には20地域がジオパー

クとして認定（うち5地域は世界ジオパークとして認定）されていることを周知するのに一役買いました。来場者の問い合わせは，今年も地質図に関することが大半でしたが，地熱や津波堆積物についての質問も多くありました。パネルやパンフレットを置いていたことにもよりますが，東日本大震災以降，これらの研究が多くの方に注目・期待されていることを反映しているのだらうと思います。また，ブースに立ち寄った学生さんの中には，将来，産総研への就職を希望されている方もいらっしゃいました。学生の目から見て研究所が魅力的に映るといえるのはうれしい限りです。

今回のブース出展は，地質標本館の渡辺真人，及川輝樹，関口 晃，芝原暁彦，地質調査情報センターの中野 俊，渡邊頼子，斎藤英二，宮崎純一，川畑 晶，大熊洋子，百目鬼洋平，上嶋正人，小口重美，活断層・地震研究センターの穴倉正展の各氏にご尽力いただき，無事に行うことができました。この場を借りてお礼申し上げます。



写真1 展示ブースの様子。

第5回ジオパーク国際ユネスコ会議報告

渡辺真人・芝原暁彦（産総研 地質標本館）

標題会議は，島原半島ジオパークと世界ジオパークネットワークの主催（産総研後援）で2012年5月12～15日にかけて島原半島ジオパークで行われました（写真1）。会期中には基調講演，テーマ別の発表，ワークショップ，ジオツアー，市民向けのフォーラムなどが行われ，会期の前後には世界ジオパークネットワーク本部会議をはじめと

するジオパークネットワークの運営に関わる会議，島原半島および日本国内のジオパークへの見学旅行が行われました。会議の登録参加者は31の国と地域から593名（過去最多，うち日本人270名），市民向けのフォーラムへの参加者数はのべ約1400名，関連イベント参加者が約2万名と，多くの参加者がありました。会期中に秋篠宮殿下，

妃殿下がおいでになり、子供フォーラムに参加され、ブースを見て回られるとともに、ジオサイトを見学されました。

基調講演では、世界ジオパークネットワークの活動の方向性に関わる次のような提言がありました。ユネスコ生態地球科学部の Patrick McKeever 氏は、ジオパークのユネスコ正式プログラム化に向けて現在議論が進んでいることを紹介しました。その上で、地球科学について多くの人たちと対話することを通じて、ユネスコの活動にふさわしい質の高いジオパークを各地域が目指すべきであると提言しました。世界ジオパークネットワークの Guy Martini 氏は、日本で始まった無形文化遺産と人間国宝の制度が各国に広がり、ユネスコでも無形文化遺産という仕組みがあることを紹介しました。ジオパークでも無形文化遺産をストーリーに取り入れてそれらの保護と振興を図り、地球の歴史か

ら人の歴史までを取り扱うことの重要性を説きました。

口頭発表やポスターセッションでは、世界各地でのジオパーク活動に関する実践報告や、新たなジオパーク候補地の紹介が行われました。これまでジオパークのなかったインドネシア、タイ、あるいは中南米の諸国からも発表があり、ジオパークの世界への広がりが感じられました。世界各地のジオパークと関係機関・団体が出展したブースには市民が多く訪れ、産総研ブースでは地形立体模型が地元の方々と各地のジオパーク関係者に好評でした（写真2）。

会議の最後に採択された大会宣言では、自然災害に人間がうまく対応するためにジオパークが大きな役割を果たすことが盛り込まれ、動く大地の国日本で行われた大会らしい宣言となりました。



写真1 開会式の様子。



写真2 GSJブースの様子。

【スケジュール】

11月16～18日	日本活断層学会「2012年度秋季学術大会」 (京都大学宇治キャンパス, 宇治市)
11月17～18日	つくば科学フェスティバル2012(つくばカピオ, つくば市)
11月19～23日	Cities on Volcanoes 7 (Colima, Mexico)
11月29～12月2日	物理探査学会第127回学術講演会 (とりぎん文化会館, 鳥取市)
12月6日	産技連・地質関係合同研究会 「地質地盤および地圏環境に関する最近の成果」 (ホテル福島グリーンパレス, 福島市)
12月6～10日	AGU 2012 Fall Meeting (San Francisco, USA)
12月18日	第11回地圏資源環境研究部門研究成果報告会 (秋葉原コンベンションホール, 東京)

◆ 編集後記 ◆

なんとスケジュール表紙写真で始まるこの11月号ですが、写真家・齊藤麻子氏の解説によると1968年に発表された当時のスケジュール漫画の最前線作品の舞台とのこと。露頭や地形をも含む自然と人の営みのせめぎ合いから感じる、科学だけでは説明できない感情は、森尻氏ほかによる人気の連載記事の中の幸田文の文章にも共通します。そこを意識しつつ口絵の地質写真コンテストの作品を眺めると、頭の中で理解したつもりになっている写真もシュールなものに見えるのは、私だけでしょうか？ もうちょっと意識すると、及川氏の地質屋視点の解説にも我々が直接体験できないシュールな点が見え隠れしているとかしていないとか。

「事実は小説より奇なり」と言われますが、金光男氏が、Lyman先生宛の書簡の謎と背景をまるで推理小説のように読み解いてくださいました。金井氏の「地質学と環境放射能」は、9月号からの続編です。震災時の原発事故の影響と今後を考える上で必要な情報と考え方が示されています。正しい情報の理解と普及のため、さらなる続編が期待されます。11月の誕生石、口絵の青木氏は、「トパーズ」、誕生石の鉱物科学の奥山氏は、「トパズ」と微妙に異なる呼び方。奥山氏、実は、「学者ならではのそのこだわり」をまだまだ書き足りなかつた様子です。
(11月号編集担当：住田達哉)